

【二】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。
 なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 夕日に映える街並み。
- ② 優勝コウホ。
- ③ 校長にシュウニンする。
- ④ 差しサワりのない話。
- ⑤ ニクガンで見える。

(1)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔から伝わる言葉に、「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」という名言があります。失敗しても、それを反省して欠点をあらためていけば、必ずや成功に導くことができるという

I

な意味を含んだ教訓です。

私は大学で機械の設計について指導していますが、設計の世界でも、

「よい設計をするには経験が大切だ」

などということがよくいわれます。私はその言葉を、

「創造的な設計をするためには、多くの失敗が必要だ」

といいかえることができると考えています。

A 人が新しいものをつくりだすとき、最初は失敗から始まるのは当然のことだからです。

人は失敗から学び、さらに考えを深めてゆきます。

これは、なにも設計者の世界だけの話ではありません。営業企画やイベント企画、デザイン、料理、その他アイデアを必要とするありとあらゆる創造的な仕事に共通する言葉です。つまり、失敗はとかくマイナスに見られがちですが、じつは新たな創造の種となる貴重な体験なのです。

いまの日本の教育現場を見てみると、残念なことに「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」という考え方が、ほとんど取り入れられていないことに気づきます。それどころか、重視されているのは、決められた設問への解を最短で出す方法、「こうすればうまくいく」「失敗しない」ことを学ぶ方法ばかりです。

これは受験勉強にかぎりません。実社会でも通用する知識・教養を教える最高学府であるはずの大学での学習もまた同じです。失敗から学ぶ体験実習のように、自分の力で考え、失敗経験を通じて新たな道を模索する、創造力を培う演習が行われる機会は、悲しいかなほとんどありません。これが、「日本人の欠点」として諸外国から指摘され、また、自らも自覚している「創造力の

(2)

欠如」にそのまま結びついているのではないだろうか。

たしかに以前は、ほかの人の成功事例をマネすることが、成功への近道だった時代がありました。そうした時代には、決められた設問に正確な解を素早く出す学習法が有効だったのは事実です。

しかし、ほかの人の成功事例をマネすることが、必ずしも自分の成功を約束するものではなく、たしかに受験勉強などで、あるような時代に大切なものは、やはり創造力です。そして創造力とは新しいものをつくりだす力を意味している以上、失敗を避けて培えるものではありません。

創造力を身につける上でまず第一に必要なのは、決められた課題に解を出すのではなく、自分で課題を設定する能力です。あたえられた課題の答えのみを最短の道で出していく、いまの日本人が慣れ親しんでいる学習法では、少なくともいまの時代に求められている真の創造力を身につけることはできません。

1 それでは、創造的な仕事をする場合、できれば身につけていたい知識とはなんなのでしょうか？

それを知るためにも、自分が新しい企画を考えるときの様子を想像してみることにはしましょう。

あなたはまず、「こうすればうまくいく」という成功話を見聞きしたいと思うかもしれません。たしかに受験勉強などで、ある決められた仕事をこなすためには、「こうすればうまくいく」話はいへん有効です。しかしあなたはじきに、「こうすればうまくいく」話だけでは不十分だということに気づくでしょう。なぜなら「うまくいく」話をもとにつくった企画は「どこかで見聞きした企画」にすぎないからです。

ではそこで、本当に欲しくなる話は何でしょうか。それがじつは「こうすればまずくなる」という失敗話なのです。

「こうすればうまくいく」といういわば陽の世界の知識伝達によつて新たにつくりだせるものは、結局はマネでしかありません。ところが、「こうやるとまずくなる」という陰の世界の知識伝達によつて、まずくなる必然性を知つて企画することは、人と同じ失敗をする時間と手間を省き、前の人よりも一ランク上の創造の次元から企画をスタートさせることができます。

この陰の世界の知識伝達には、さらに別の大きなメリットもあります。

じつは私もかつては大学の授業で、ある問題に対して決まった解を出す、「正しいやり方」のみを学生たちに指導していました。当時は、知識を身につけさせる上で、それが最短かつ効果的な方法と考えていたからです。

B 結果として、「正しいやり方」を学んだ学生たちが身につけた知識は、表面的なものにすぎなかったのです。パターン化された既成の問題にはきちんと対応できても、実際に新しいものを自分たちで考えさせてつくらせてみると、こうした知識はほとんど役に立ちません。それ以前の問題として、自分が新たにどういうものを生み出そうとするのか、肝心の課題設定さえ自分の力で行う能力が身につけていない学生が数多くいました。

2 この問題を解消するために、私は効果的な指導方法をいろいろと模索したのですが、その中で予期しないことが起こり、思いどおりにならない経験から真の理解の必要性を痛感することの有効性に気づきました。

大事なことは、ひとつには学ぶ人間が自分自身で実際に「痛い目」にあうこと、もうひとつは自分で体験しないまでも、人が「痛い目」にあつた体験を正しい知識とともに伝えることです。「痛い話」というのは、「人が成功した話」よりずっとよく聞き手の頭にも入るものなのです。

このように、陰の世界の知識、すなわち失敗経験を伝えることは、教育上大いに意義のあることですが、残念なことに失敗そのものには、「回り道」「不必要なもの」「人から忌み嫌われるもの」「隠すべきもの」などといった負のイメージが常につきまっています。そのせいか、いまの日本には、失敗体験が情報として積極的に伝達されることがほとんどありません。

本来は成功を生み出す「もと」であり「母」であるはずのものが、まったく生かされていないのは、非常にもったいないことです。私が紹介しようとしている「失敗学」が、いまの日本の中での失敗そのものの見方、扱い方に II を投じるものになることを切に望んでいます。

最近大きな事故のニュースに接する機会が多くなっています。一九九九年秋に問題になったJR西日本のトンネルのコンクリート剥落事故、九月に起きた東海村でのジェー・シー・オー(JCO)の臨界事故などに続いて、二〇〇〇年に入ってから三月に地下鉄日比谷線の脱線事故が起きたりと、思わず目を覆いたくなる事故が相次いで起こりました。

さらに、大きな社会問題になった六月の雪印の食中毒事件や増える一方の医療ミス（これは従来隠されていたものがようやく出てきただけではないかとも思いますが）などが新聞紙上をにぎわしたりと、従来だったら考えられないような失敗が、ここきて一気に噴き出している印象を受けます。

これらの事故に対し、

「日本の技術基盤が崩れかけている」

という論調もありますが、これはあまりにも一方的な見方です。いずれのケースも日常的な失敗とのつき合い方そのものに問題があり、いわば失敗とうまくつき合うことができなかったことが原因の事故だと、私自身は考えています。

人の心は意外に弱いものです。強い負のイメージが付きまとう失敗を前にすると、誰しもつい「恥ずかしいから直視できない」「できれば人に知られたくない」などと考えがちです。失敗に対するこうした見方は、残念ながらいまでは日本中のありとあらゆる場面で見受けられます。

実際、負のイメージでしか語られない失敗は、情報として伝達されるときにどうしても小さく扱われがちで、「効率や利益」と「失敗しないための対策」を秤にかけると、前者が重くなるのはよくあることです。人は「聞きたくないもの」は「聞こえにくい」し、「見たくないもの」は「見えなくなる」ものです。

しかし、失敗を隠すことによって起きるのは、次の失敗、さらに大きな失敗という、より大きなマイナスの結果でしかありません。失敗から目を背けるあまり、結果として、「まさか」という致命的な事故がくり返し起こっているのだとすれば、失敗に対するこの見方そのものを変えていく必要があります。

すなわち、最近のような事故を防ぐ上でも、やはり失敗とのつき合い方そのものを変えていくことが大きなポイントになります。忌み嫌うだけのいままでの方法には限界があることは、最近になって相次いで起こっている事故を見れば明らかです。そこから一歩進んで、失敗と上手につき合っていくことが、いまの時代では必要とされているのです。

（畑村洋太郎「失敗学[※]のすすめ」）

※この本は二〇〇〇年十一月に初版刊行されました。

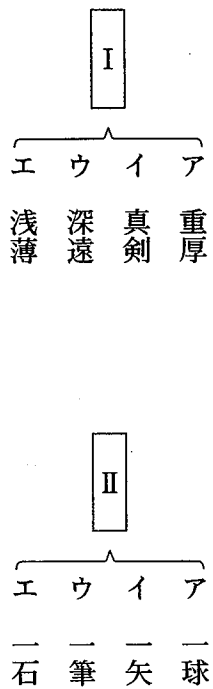
問一

A、Bに入れる言葉として、最も適当なものを次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア また イ さらに ウ しかし エ ところで オ なぜなら カ すなわち

問二

I、IIに入れる言葉として、最も適当なものを後のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。



問三 次の一文は問題文中から抜き出したものです。この一文を問題文中に戻したときの直前の五字を抜き出さない。

（ただし、句読点等も字数に含みます）

昨日までの成功は、今日の成功を意味しません。

問四 ――線「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」とありますが、ここでの「もと」「母」と同じ意味で使われている言葉を問題文中から漢字一字で抜き出しなさい。

問五 ――線1「創造的な仕事をする場合、できれば身につけていたい知識」について

(一) それはどのようなものであると筆者は言っていますか。問題文中から四字で抜き出しなさい。

(ただし、句読点等は字数に含みません)

(二) またその知識を身につけることで筆者はどのようなことが分かると言っていますか。問題文中から八字で抜き出しなさい。(ただし、句読点等は字数に含みません)

問六 ――線2「この問題点」について、その問題点が簡潔にまとめられている部分を問題文中から六字で抜き出しなさい。

(ただし、句読点等は字数に含みません)

問七 ――線3「失敗と上手につき合っていくこと」とは、どのようにしていくことですか。三十字以内で説明しなさい。

(ただし、句読点等も字数に含みます)

問八 問題文における筆者の考えと一致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「失敗は成功のもと」であるので、後先考えず、とにかく繰り返し失敗することが大切だ。

イ 「失敗」を「成功」に変えるためには、受験勉強などを通じて、決められた課題に解を出す方法を学んでおく必要がある。

ウ いまの日本では、「成功例に学ぶ」という昔の時代に有効であった教育が未だになされつつづけている。

エ ある企画を立てる際に、失敗した話を聞いておくと、その話をしてくれた人よりも必ずよい企画が立てられる。

オ 「失敗」には「人から忌み嫌われるもの」「隠すべきもの」といった負のイメージが伴うため、失敗談は人の心に残りにくい。

カ JR西日本やJCOなどの大きな事故は、「失敗」そのものの見方や扱い方を改善できていれば、未然に防ぐことができた。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

木島は、さつさとスケッチブックを開き、鉛筆を取り出し、私をじっと見据えた。不思議な目だった。照れも迷いも何もない。落ちつきはらっていて恐いくらい静かだ。

私は動けなくなった。木島の視線に射すくめられ、捕らえられてしまったように。

音のない世界。温度のない世界。北方の山の湖のように、陰鬱^{注1}にひっそりとして、しんと澄んでいる。木島ひとりしかない世界だった。木島と白い紙と鉛筆と、そして、動くことのできない彫像のような私がそこにある。

やがて、彼は鉛筆を動かし始める。手がゆったりと大きく動き、全体の形をとらえていく。顔や身体^{からだ}が縦横の長さや厚みを測られたようなシンプルな立体に写される。手を動かしながらも、彼の目はほとんど私から離れることはなかった。観察されているというよりは、徹底的に細かく分解され、検査され、彼の絵の中に新たに組み立て直されているような気がした。

すばらしく正当なデッサンだった。木島はどこで絵を習ったのだろうと私はぼんやりと考えていた。中学の時かな。それとも、もっと昔から絵画教室のようなところへ通っていたのかな。

「描かないんスカ？」

隣の男子が声をかけてきて、金縛り¹のような状態が解けた。私はまだスケッチブックを広げていかなかった。大きく息を吐き出した。身体にじつとりと汗をかいている。

(中略)

木島は休むつもりはないらしかった。五時間目が終わり、十分の休み時間、仲間たちに声をかけられてもろくすっぽ返事もせず、彼らはちよつと呆れたように連れだつて教室を出ていつてしまった。私は動けなかった。もし、自分が描かれているんじゃないかと木島の絵のそばから動けなかったと思う。

木島が鉛筆で描いているのは、ただの下書きじゃない。これは、水彩画じゃない。水彩画にはならない。木島は二本の鉛筆

——たぶん3BとHBだと思う——だけを使って、柔らかい輪郭線^{りんかくせん}をとり、色も影も灰色や黒のトーンで描きこんでいる。このまま最後まで単色の濃淡で仕上げてしまうつもりだろう。

通ちゃん^{注2}は、スケッチ以外に鉛筆は使わない。それも、だいたいラフでクイックなスケッチだから、鉛筆だけでこんなふうにじつくりと作られていく絵の世界を初めて見た。

きれいだと思った。二本の鉛筆で、なんと多彩な線が引けるんだろう。その線たちが、なんと見事に形を作っていくんだろう。繊細^{せんさい}で精密ですがすがしい。

でも——と私は思った。なんか、よそゆきの感じがする。らしくない。いつもの似顔絵のやらしさがない。あの強烈な個性がない。ドキッとするような大胆でシャープな線がない。

たぶん、正確に描こうとしすぎてるんだ。木島の落書きには、独特の歪み^{ゆがみ}があつて、モデルの特徴を鋭く捕らえる。今、スケッチブックに描かれている私は、人間というリアルな物体だけど、髪や服の質感は見事だけど、どんな名前の十六歳の少女でもないような感じがした。完成しないとわかんないけど。

休み時間が終わると、私は絵の具の準備をした。自分の下書きにたいがいうんざりしたので、せめて色をつけて、もう少し絵のようなものになりたいと思ったのだ。下手は下手なりに、いつも、あれこれ考えてねばつて奮闘するのだが、今日はどうしても集中できなかった。見るより、見られるほうに、描くより描かれるほうに、どうしても気持ちがいってしまふ。

つくづく思った。

私は絵ができていくのを見るのが好きだ。いい絵ができていくのを見るのが、何より何より一番好きだ。絵のそばにいたい。好きな絵のそばにいたい。どうしようもなく惹きつけられる。

六時間目が終わりに近づいても、木島は絵の具を出す気配はなく、影や色を灰色や黒のトーンで細かく描きこんでいる。鉛筆の数は三本に増えた。

美術の大森先生はゆつくり巡回しながら、アドバイスをしていたが、木島の後ろで歩みを止めた。顔つきがずっと険しくなる。

「何をやってるの？」

三十半ばで、神経質そうな大森先生は男にしてはかん高い声でとげとげしく聞いた。

「デッサンをやれって誰が言った？」

木島の鉛筆が静止した。

「どうして、君は、いつも、そういうことばかりするの？」

この六個の机の生徒たちは、みんな描くのをやめた。男の子たちは互いに顔を見合わせている。どうやら前科⁴があるらしい。一年の時のことは、私は知らないけど。木島は自分の絵に目を落としたまま黙っていた。

大森先生はイライラした様子で片足のかかとを細かく踏みならした。

「あのねえ、美大を受けるにしても、デッサンだけやればいいってもんじゃないよ。それにね、これは授業なんだから、ちゃんと聞いた通りにしてくれないと困るんだよ」

「受験とか、そんなんじゃないス」

木島はぼそりと答えた。

「じゃあ、なんだ？」

先生の声は低くなり、そのぶん、怒りが激しくなったのが感じられた。ほかのグループの生徒たちも、こちらを注目していた。

木島は細い目をいつそう細めた。視線は空に泳ぎ、何もとらえていなかった。一瞬、何か鈍い悲しみや痛みのようなものが彼の顔に浮かんだ気がした。私ははっと胸を突かれたが、彼はまたすぐに目を伏せてしまった。机に置いている両の拳^{こぶし}に力がかもった。何かに耐えているように、何かを激しく迷っているように。節のところが白く尖^{とが}って見えた。

そして、彼はゆっくりと口を開いた。

「鉛筆で A 描けるようにならないと、色が使えないんです」

「だから、なんで？」

先生の声には苛^{いら}立ちのほかに強い侮^{おご}蔑と圧力がこめられていた。

木島の顔から B 表情が消えた。いつか見たことのある寒い顔になった。それからは何を聞かれても言われても一言も口をきかなくなり、ついに教室から出ていくように命じられた。

木島はスケッチブックとペンケースを持って、C 出ていってしまった。描きかけの私の絵も出ていってしまった。

教室の中は、みんなが息を殺しているような堅い沈黙がたちこめていた。私はしばらく D していた。何が起きたのかよく飲みこめなかった。

私はいきなり立ち上がった。その唐突な動作に、教室中の視線がいつせいに集まった。何かはつきりした覚悟やモクロミがあったわけじゃなかった。ただ、あの絵がまだまるで未完成なこと、そして、木島が続ぎを描きたいんじゃないかと考えていたのだ。

廊下には、もう木島の姿はなかった。私はふと思いついて、美術の授業が始まる前に渡り廊下から見た、サッカー部の部室の前へ行ってみた。

教室を追い出された流浪^{ろうろう}の絵描きは、別にたいして悲しもうでもなく、フェンスに向かってゆるやかに上っていく芝生の傾斜地に横向きに E 寝そべっていた。私に気づくと、ちよつと驚いたように目を見張ってみせた。こんなふうに追いかけてきたものの、いざとなると、なんて言ったらいいのか、ぜんぜんわからなくて、身体中の血液が顔に向かって逆流してくる気がした。木島は面白がつるみたいじろじろ見ているだけで、何も言ってくれない。しょうがなくて、やっこの思いで言葉を口からしぼりだした。

「最後まで描く？」

すつげえマヌケに響いた。

木島は切れ長の細い目の中に疑問符を浮かべて、まだ口をきかない。

「絵だよ」

私はぶつきらぼうに説明した。

「見て描いたほうがいいんでしょ？」

木島は芝生の斜面に片肘かたひじをついて、ゆっくり上半身を起こした。

「さっきの？」

木島はたいした熱意もなく聞き返した。私はうなずきながら、少しがっかりし、とても恥ずかしい気持ちになった。のこのこなんとこまで来ちまつて……。ここで何してるんだか。視線をどこに向けたらいいのか、わからなくなった。自分の足元を見たり、木島の頭の上のほうにある緑のフェンスを見たりしていた。

「なんか、ちげえなア」

しばらくして、つぶやくような木島の声が出た。目が合った。また観察の目つきで不遠慮にじろじろ見ている。そして、脇わきに置いてあるスケッチブックを取り上げると、私を描いたページを開いて眺めた。首を傾げた。

「なんか、ぜんっぜん違うね？」

同意を求めるように言われて、私も木島の横に膝ひざをついて身をかがめて絵をのぞきこんだ。それは描きかけでも人を惹きつける力を持った美しい鉛筆画だった。大人の美術の先生がジェラシーを感じたとしても不思議はないような優れた技術だった。でも、木島は、たぶん、そんなことが聞きたいんじゃないんだ。

「自分の顔ってわかんないよ」

私は言った。

「でも、いつも描いてるラフなスケッチのほうが、いい。ああいう線のほうが、いい」

「何？スケッチって？」

木島は横目で私を見た。それから、鼻でフツと馬鹿にしたように笑った。

「授業中に遊んでるヤツ？」

私は笑わずに重々しくうなずいた。

「マジで？」

私はもう一度重々しくうなずいた。

「なんで……」

木島は質問しかけて、気が変わったように、

「いつか、すげえ怒ってたじゃん」

とぼつんと言った。

「怒るくらい……パワーがある」

私は答えた。

木島は何も言わずに、また私を見ていた。とても、とても長く見ていた。

(佐藤多佳子『黄色い目の魚』)

注1 陰鬱………陰気で、明るさや活気が感じられないさま。

注2 通ちゃん………主人公の叔父。漫画家。

注3 ラフでクイックなスケッチ…荒い、すばやいたッチで描かれたスケッチ。

注4 ジェラシー………ここでは、木島のスケッチの優れていることを、うらやみ、くやしと思う気持ち。

問一 — 線1「金縛りのような状態」になってしまったのはなぜですか。その理由として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 木島の落ち着きはらった恐い目で見つめられ、恐ろしくて動けなくなったから。
- イ 木島の真剣にデッサンする視線に圧倒され、動けなくなってしまったから。
- ウ 木島に比べ、自分の才能のなさにショックを受け、動けなくなってしまったから。
- エ 木島のデッサンのすばらしさに見とれて、動けなくなってしまったから。

問二 — 線2について、このように「動けな」くなくなってしまう「私」の好みについて、具体的に述べている段落を探し、始めの五字を抜き出して答えなさい。(ただし、句読点等も字数に含みます)

問三 — 線3の理由として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 木島の描く「私」の絵には、モデルの特徴を鋭く捕らえた独特の歪みがないから。
- イ 木島の絵は、髪や服の質感だけがとてもリアルに表現されているにすぎないから。
- ウ 「私」と異なる名前の少女でも、髪型や服装にそれほど違いがあるわけではないから。
- エ 学校の美術の授業なので、「私」以外の者が木島のモデルになっても不思議はないから。

問四 次の一文は本文中から抜き出したものです。抜き出された文の直後にくる文の最初の五字を答えなさい。

(ただし、句読点等も字数に含みます)

わかるのは、この教室の中で最高の絵描きがいなくなってしまったこと、もっと見ていたかった絵が消えてしまったことだけだった。

問五 — 線4「前科」とはどのようなことだと考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 神経質な先生の授業をわざと妨害したこと。
- イ 大胆でもシャープでもない線で好き勝手に絵を描いたこと。
- ウ 大森先生のアドバイスを聞かず、絵の修正をしないこと。
- エ 先生が指示したこととは異なる行動をしたこと。

問六 A E の中に入れるのに、最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ふつと イ あっさりと ウ ごろりと エ ちゃんと オ ドキッと カ ぼうぜんと

問七 — 線5「少しがっかりし、とても恥ずかしい気持ちになった。」のはなぜですか、六十字以内で説明しなさい。(ただし、句読点等も字数に含みます)

問八 — 線6「なんか、ちげえなア」について、この時の木島の気持ちとして、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 美術の大森先生の考えと、自分たちの思いとに大きな違いがあることを感じている。
- イ 美術室で描いていた絵と、今スケッチブックを開いて眺めた絵では違いがあることを感じている。
- ウ 木島が描いている「私」の絵と、モデルであるリアルな「私」とでは違いがあることを感じている。
- エ 授業中にモデルをしていた時の「私」と、足元やフェンスを見たりしている「私」とでは違いがあると感じている。

問九 ― 線7について、なぜこのように思うのですか。その理由として最も適当な部分を、問題文中から七字以内で抜き出し、解答らんに合うように答えなさい。(ただし、句読点等も字数に含みます)

問十 次のア～オについて、本文の内容と合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 木島の正当なデッサンの技術は、幼い頃から絵画教室へ通って習ったものである。

イ 「私」は美術の時間に絵を描こうとするが、どうしても見られていることに気持ちが向いてしまった。

ウ いつもは優しい美術の大森先生だが、時には激しく怒ることがある。

エ 木島は鉛筆の単色の濃淡を利用して絵を仕上げるつもりであり、絵の具を使う気はまったくない。

オ 木島の描く似顔絵に表れる独特の感じは個性と言ってよいものだ。

③
10

②×5

①

②

③

④

⑤

③
4

②×2

問一

A

B

③
9

③×3

問二

I

II

問三

④
16

④×4

問六

問四

問五

⑥
6

⑥×1

問七

⑤
10

⑤×2

問八

③
9

③×3

問一

問二

問三

④
8

④×2

問四

問五

②
10

②×5

問六

A

B

C

D

E

⑥
6

⑥×1

問七

③
12

③×4

問十

問九

問八

あいうすけっちのぼうが

から。

②
10

②
45

②
45

総点

100

受験番号

氏名